

## JAPONAIS

---

Commenter en japonais le texte suivant et le traduire de (l. 13) 「彼女は簡単服を…」 jusqu'à (l. 22) 「ながらどこに落ちついたらいいのかに迷っていた。」.

午後六時、サントス<sup>1</sup>に向け解纜<sup>かいらん</sup>—

(中略)

最後の夜であったから、どれ程の大騒ぎをしても船長や事務長は文句を言わなかった。というよりも彼等<sup>かれら</sup>は彼等で村松監督たちと別的高级なグループを造り、無事  
5 5 な航海の終りを祝っていた。ここには古いウイスキーがありチーズやベエコンやア  
スパラガスがあった。

酒飲みの群れに加わらない女たちは早くから床にはいった。お夏は赤く酔った孫  
市が大泉さんと二人で何かげらげらとだらしなく笑っている姿を見すてて、最後の  
夜を見るためにデッキに上った。デッキは闇<sup>やみ</sup>がふかく閉ざして、波のしぶきと一緒に  
10 10 に冷たい夜気がひえびえと肌<sup>はだ</sup>にしみた。南十字星<sup>サザン・クロス</sup>は神聖な神の玉座の姿をして高く  
頭上に輝いていたが、日本では中空にあった北斗七星は北の水平線に半ば沈んで、  
海水を汲<sup>く</sup>みあげようとしているようであった。

彼女は簡単服を着ていた<sup>そで</sup>ので、袖のないために腋<sup>わき</sup>の下が寒い気がした。一段下の  
船室から歌声がきこえていた。そのどよめきを足の下に踏みながら、お夏はずっと  
15 15 船尾の方まで歩いてみた。夜気の寒さにデッキは人影もなくて、高い空でワイヤロ  
ープが風に鳴っていた。病室の下をくぐり、船の後端まで来たとき、彼女は一人の  
男が舷側<sup>げんそく</sup>から波を見おろしている黒い後姿を見た。小水であった。

小水は今は全くの孤独であった。松村と争ってからのちは、同志会員すらも味方  
につく事を躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>しはじめた。船室では最後の夜宴が次第に乱調子に高まっている。  
20 20 その中にさえも彼は自分の安らかな居場所<sup>みいだ</sup>を見出し得ずに、ひとり逃れて来たので  
あった。ブラジルに彼を待つ一人の人が有るわけでもなく、今更ながらどこに落ち  
ついたらいいのかに迷っていた。配耕主任の秋穂さんに相談したら、何とか身のふ

---

<sup>1</sup> Santos : port brésilien, porte d'entrée de l'immigration japonaise.

り方をつけてくれるだろうというのが最初からの予定であったが、今となっては孤独の心細さがしきりであった。

25 彼はふりかえってお夏を見ると、やあと行って無意味に笑った。

「みんな、騒いでいますな。大騒ぎですよ。僕は<sup>ぼく</sup>どうもあんな騒ぎ方は出来ませんよ。ははははは」

お夏は一間ほど離れてじっと海面を<sup>なが</sup>眺めていた。すると小水は、もう随分遠い以前に、神戸の収容所でこの女と床を並べて眠った一夜のことを思い出した。

30 「佐藤さん、あなたは、門馬さん達と別れて、やっぱり二、三年<sup>た</sup>経ったら日本へ帰りますか」と小水は一步近づいて言った。彼は淡い闇の中で彼女がかすかに首を振ったらしいのを認めた。

「帰ってもつまらんですよ」と彼は息をはずませた。「実際、帰っても、格別いいこともないですからなあ。それより……それよりこっちで結婚なさるんですな」

35 この機会に、小水は勢いに乗って、むしろ急いだ調子でみんな言ってしまった。

「その方が利口ですよ。こっちで結婚して、夫婦<sup>ともかせ</sup>共稼ぎで一生懸命やるんですな。そうすればまた、日本見物に帰ることだって出来ますよ。ねえ、そうじゃないですか。丈夫で働いて食って行けば、どこにいたって同じことですよ。ねえ、僕と一緒に働いて見ませんか」

石川達三 (1905-1985) 『蒼氓』 (1939年)